

Title	一九九七年度修士論文要旨；一九九七年度修士論文要旨題目；一九九七年度卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1998
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.67, No.3/4 (1998. 7) ,p.201(561)- 218(578)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19980700-0201">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19980700-0201</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 一九九七年度修士論文要旨

## [日本史学専攻]

九世紀における日本律令国家の対外意識と対外交通  
—東アジア交通形態の変化への対応と新羅觀の変容を中心にして—

村上 史郎

本論文では、九世紀における日本の古代国家（日本律令国家）の対外意識を、当該期の対外交通の形態と新羅觀の史的変容とを主たる題材として検討した。その際、いわゆる外交史・対外交渉史ではなく、（広義の）対外關係史として、外交以外の商人による国際交易、民衆の漂流や移動、入唐求法僧にみられるような文化交流等の諸々の交通をも含めた対外交通を対象とすること、およびそうした多様な対外交通を生じさせた八世紀末～九世紀の東アジアにおける交通形態の変化や日本律令国家の変容に留意することに努めた。

第一部「九世紀における東アジア交通形態の変化と日本律令国家の対応」では、まず八世紀末以降における東アジアの国际情勢と交通形態の変化（緊張した国際関係を背景とする諸王権間の外交が中心の交通形態に代わり、國際情勢の緊張緩和、唐国内の分権的傾向や新羅国内の内乱等を背景に前出の多様な交通が生じた過程）を、在唐新羅人集団の形成と国際的交易圏の

形成を中心に概観し（第一章）、ついで第二章「大宰府大唐通事と新羅訳語についての考察」で、日唐間を往来する商人であつた唐人張友信が大宰府の通訳官（大唐通事）として律令国家の官人機構にも組み込まれていたことなど、対外交通形態の変化に律令国家が積極的に対応していた側面を明らかにした。

第三章「日本古代九世紀における公的対外交通の諸相」では、九世紀を通じ、日本からの外交使節（遣唐使・遣新羅使・遣渤海使）の派遣は途絶するが、日本—新羅間の地方官による漂流民の送還、唐から先進・希少物資を入手するための下級官人の派遣（本稿では「入唐交易使」と呼ぶ）等、日本からの公的使節（官人）の派遣が途絶したわけではないことを論じた。

近年、九世紀中葉以降における新羅に対する排外意識の高揚を強調する論考が少なくない。しかし、史書等に見える支配層の觀念的な排外意識と現実の対外交通とは峻別して論じなければならない。また、中央貴族層と地方官との対外意識の相違の有無についても検証の必要がある。第二部「九世紀における日本律令国家の新羅觀の変容」では、対外意識とその背景にある対外交通のあり方との関係について考察した。例えば、貞觀十一年（八五九）の「新羅海賊」来襲事件の際、大宰府は飛駅による奏上をしておらず事件をさほど重要視していないなかつたとみられるのに対し、朝廷はこの事件を「國威」の「損辱」であるとして大宰府司を譴責しており、また当時の大宰府管内では辺境防備のための烽や閑の管理が弛緩しているなど、朝廷と地方官との間に認識の乖離が認められる（第一章）。

さらに第二部第二章では、九世紀中葉の貞觀年間以降の新羅に対する排外意識について、呪術的・宗教的色彩が強いこと、その扱い手は中央貴族層とみるべきこと、新羅の位置付けが「蕃國」（華夷思想に基づく観念的な朝貢国）から「隣敵」（隣接する敵国）へと変容していることを指摘した。

終章では本論文全体の結論として、九世紀の日本律令国家の对外交通には、東アジアの交通形態の変化への積極的な対応が認められる一方、実務の地方官への委任の結果として、中央と地方との对外意識の乖離、中央貴族層における排外意識の高揚といった現象が生じたとみるべきことを指摘した。

### 中世前期の御神楽と儀式空間

池和田 有紀

古代から中世における「宫廷音樂」について、音楽学・民俗芸能史的な研究、あるいは歴史学からであっても音楽そのものにのみ視点を置いた研究が目立つが、より当該期の社会的・政治的状況と関連させて考察する必要がある。特に、宫廷音樂は儀式と不可分の関係にあり、儀式の盛衰と音樂の盛衰が同一であると同時に、儀式が政務の一つと見なされるなら、音樂と政治も密接に関連したといえるからである。実際、それらの主催者は、天皇・院・摂関家、権門寺社、幕府などであつた。

本稿では政治的動向と関連づけて音樂の考察を試みたが、そ

の素材を「御神楽」としたのは、それが当該期において継続性・宗教性・呪術性・娛樂性などの性格を有したことによる。

第一章「中世移行期における御神楽の展開」では、宮中内侍所のほか石清水・日吉社で、十二世紀末以降、天皇・院の身体保全・天変地異沈静などを目的とした臨時御神楽が盛行し、恒例のそれも二季御神楽となつたことを明らかにした。その背景には、十一世紀末に恒例儀式として成立した内侍所御神楽が、それ以前からも不定期に天皇の私的「御願」成就を目的として行われたように、予め御神楽が祈祷手段としての性格を有したこと、中世移行期にそれが兵革や天変地異などに伴い、改めて顕在化したことが挙げられる。

第二章「摂関家沙汰御神楽の構造——春日社を中心に」では、摂関家沙汰（主催）の御神楽の実態と意義を、氏社春日社を例として考察を加えた。本章の眼目は、近衛家による恒例二季御神楽沙汰に対する、他家の介入の過程である。鎌倉期を通じて、氏長者となつた九条家・鷹司家による頻繁な臨時御神楽の沙汰とそれに対する近衛家による恒例四季御神楽化、更に、九条家による大原野社における二季御神楽の始行など、摂関家諸流の当主が争つて自領を寄進し、御神楽を沙汰する様子からは、所領の一部を神領化し、御神楽の遂行主体である社家を掌握しようとする彼等の姿勢が窺える。御神楽沙汰は、摂関家内において自流確立をアピールする手段であり、「祈祷」の意味を持つ御神楽はそれに最適な媒体であつた。

第三章「内侍所御神楽と無能召人」では、鎌倉初期の内侍所

御神楽に関する記録にのみ見出だせる「無能」「無能召人」の語の意味と、それが登場した背景を探り、御神楽を奉仕した人々の立場から、その在り方を考察した。まず「無能」を、御

神楽を行う能力が無いという意味でなく、「清華人・堪能者でありながら、御神楽の所作（奏楽）を行わず、末座に祇候する」役と定義づけ、それが矛盾した呼称であり、十二世紀末以降の史料のみにしか見出だせないことについて次のように考えた。本来、御神楽の基本的な所作は笛・筆箋などの五役であるが、内侍所御神楽に参仕した近衛・陪從・殿上人六人宛の計十八人の堪能者の中、特に秀でた五人がそれぞれを担つた。こ

のうち役につけない殿上人はある種「能力に欠ける」状態であ

り無能の原形といえる。これに対し鎌倉期以降、無能は御神楽に不可欠な「役」として認識されたため史料上に登場した。その理由は、臨時御神楽・二季御神楽盛行と時を同じくして、五役全てがいかなる時も殿上人によつて担われる傾向が強まり、殿上召人六人のうち残りの一人を、上記の定義をもつ「無能召人」としたからに他ならない。こうした内侍所御神楽所作人の殿上人主体化傾向は、天皇の御願成就の手段として御神楽が、当該期においてこれ迄になく重視されたため、より天皇に近い「侍臣」所作が望まれたことによるところと考える。いわば「無能召人」の出現は、天皇と侍臣との結合強化傾向の産物であつた。

以上から御神楽は、諸権力との結び付きから、従来の音楽史研究において宫廷音楽衰退期とされた中世以降、むしろ発展を遂げたことを結論付けた。

### 鎌倉幕府財政制度試論

—関東御公事と関東御領—

清水 亮

鎌倉幕府の財源には、鎌倉幕府の直轄領である関東御領、将军が知行国主となる関東知行国、御家人から徵收した雜稅則ち関東御公事が挙げられる。本論文では、関東御公事の問題を中心に鎌倉幕府の財政制度を論じ、補論では関東御領にも若干言及した。

まず第一章では、関東御公事の制度的成立が承久の乱以降であるという先行研究を前提として、関東御公事の賦課基準の基礎資料が、承久の乱の戦後処理の際に没官地把握・新補率法適用の為幕府によつて集積された大田文及び所領得分のデータであり、これらが関東御公事の賦課基準の決定にも流用されたことを指摘した。そして、御家人の集積する多様な得分を一律の基準で換算するため、関東御公事の徵収にあたつて錢が用いられ、十三世紀中頃までには錢納が定式化したことを見出した。

第二章では、関東御公事が地頭得分からの供出を定められる過程を検討した。関東御公事の在地転嫁はしばしば行われ、この負担が百姓を圧迫して年貢徵収の妨げとなつた。幕府はこれを禁止する法令を多く出していいる。このような幕府の姿勢は、頼朝期にその萌芽が見出され、実朝将軍期には御家人役の在地転嫁を容認した事例が見出せるが、承久の乱から御成敗式目制

定頃までの泰時執権期には、幕府は再び関東御公事を含む御家人役の在地転嫁を禁止するようになることを指摘した。そしてその背景には、頼朝期と泰時期に共通する朝廷との協調路線、泰時によつて「右大将家之例」が強調されるという幕府の政治姿勢があつたことを指摘した。

第三章では、御家人役の賦課台帳である幕府作成の大田文を通時に検討し、幕府の歴史上の画期に対応して大田文が作成される傾向が強いこと、関東御公事の制度的成立を画期として、所領惣田数のみならず御家人役の基準となる所領内の定田（鎌倉幕府法での「公田」）が記載される事例が見出せることから、大田文の記載方式と幕府政治史・制度史の密接な関係を指摘した。

以上、三章にわたる考察の結果、①関東御公事の制度的成立は、評定衆の設置・御成敗式目の制定といつた幕府機構整備の一側面として把握できる、②四代將軍藤原頼経が幼少であつたことも作用して、公事徵収にあたつて將軍権力を必ずしも必要としない機構を北条氏が作り上げ、北条氏の主導する政治運営の物質的な基礎として関東御公事が機能したと評価した。

補論では、関東御領真壁荘を素材として、平家没官領であつたと思われる当荘の成立過程・当荘地頭真壁氏の政治的動向を跡づけた。

#### 室町後期東国における支配構造の変質過程

——鎌倉府・古河公方を中心に——

阿部 能久

室町幕府の東国支配機関である鎌倉府では、享徳三年（一四五）に鎌倉公方足利成氏によつて関東管領が謀殺されるという事件が起り、これに端を発する享徳の乱は、鎌倉府内の抗争にとどまらず、幕府も巻き込んで一十八年にも及ぶ大乱となつた。この乱によつて鎌倉府体制は分解への道を辿ることになるのだが、東国における公方と管領を身分編成の頂点とする体制自体がただちに全面的な崩壊を迎えることはなかつた。鎌倉を追われて古河へと走つた後も、鎌倉公方は古河公方として五代にわたり、戦国期東国において重要な役割を果たし続けることになる。

本稿ではこの古河公方政権が、成氏から義氏までの五代の間に、如何なる変質過程を辿つたかについて、先行研究においてはこれまであまり触れられることのなかつた古河公方発給文書の様式変化を手掛かりに、明らかにしていった。

鎌倉公方（古河公方）発給文書の様式は、御判御教書形式と書状（御内書）形式の二種類に大別される。持氏以前の鎌倉公方発給文書の主流が御判御教書形式であったのに対し、享徳の乱勃發以降の古河公方発給文書においては書状形式がその大半を占めるようになり、享徳の乱が古河公方政権に与えた影響の

大きさを窺わせる。この成氏期における御判御教書形式から書状形式への転換という一大変化は、多少の相違はあれど基本的には政氏・高基へと受け継がれていった。この変化は極言すると発給文書の厚札化であり、打ち続く戦乱により鎌倉府体制が分解していく中で古河公方権力の存続を図るために採られた方策であった。つまり公方の相対的地位の低下が発給文書の厚札化をもたらした訳だが、ともかくも現実に即した対応が試みられたのは確かである。

ところが晴氏期になるとこれまでの傾向とは異なり、文書発給上の無原則さが目立つようになつてくる。これは公方家の内紛争や後北条氏勢力の台頭によつて古河公方政権の弱体化が進み、現状への対処能力がかつてないほど低下していることの現れと考えられる。

そして後北条氏の後押しによつて公方家を継承した義氏の発給文書からは、印判状の使用など後北条氏権力の強い影響を看取することができる。また後北条氏の当主が義氏発給文書中で、かつての関東管領上杉氏と同等の礼をもつて遇されており、後北条氏の関東管領化志向を窺わせるものとなつてゐる。さらに義氏の発給文書では、感状や官途状などのいわゆる「名譽系」文書を除くと軍事関係文書が極めて少なくなつており、古河公方が後北条権力の中で、榮典（名譽）を授与する役割を担い、軍事的役割を担う必要のない（または担えない）存在となつていつたことが明らかになつた。

## 近世における下肥取引と都市農村関係 ——江戸周辺農村を中心として——

山中 裕典

近世における江戸周辺農村のあり方は、江戸との関係に規定されるという面を持つていた。特に、日々の生活の中で江戸から廃棄される人糞尿を周辺農村に運搬し、肥料すなわち下肥として利用する営みは、江戸の都市生活と直結するという点で、江戸周辺農村を特徴付けるものとして、従来から評価されてきた。しかしながら、下肥利用圏の具体的な範囲とその成立に至る理由、流通網への江戸と周辺農村農民の関わりといった点については、十分に明らかにされていない。

そこで、本論文では、(1) 江戸周辺農村において、下肥取引がどのような範囲に及んでいたのか、またその要因は何か、(2) 下肥取引の各過程において、江戸周辺農村の農民は具体的にどのように関わっていたか、の二つの問い合わせていく。史料として、村明細帳類にある使用肥料記事、下肥取引をめぐる証文類、下肥の収集・分配の帳簿記録、下肥利用の覚書などを取り上げる中で、以下のことが明らかになつた。

下肥利用の開始が確実化する中世末期において、既に人糞尿が都市から農村に運ばれて利用されるという動きが見られた。都市近郊という地理的位置が、都市から排出される人糞尿を利用した多肥集約型農業経営を成立させる。そのことは大都市江

戸の周辺農村においても同様であった。江戸より五里以上離れるに、肥料利用状況に各々の地理的条件によって特色が出てくるのに対して、江戸に近接するにつれて江戸から供給される下肥の利用率が上昇し、地域差を越えて下肥を専一に利用するようになっていく傾向が見られる。

下肥取引には江戸周辺農村の農民が深く関わっていた。江戸市中における屎尿汲み取りである「下掃除」は、初期の出入り関係が次第に変質し、汲み取りにおける下肥獲得・掃除代取得の双方が「株」として、金銭で交換可能な権利として扱われ、売買の対象になつていった。近世後期になると、江戸東部・北部地域では名主などの上層農が、肥船を所持し、下掃除「株」を購入して下掃除場所を確保し、大量の下肥を運搬・販売する「下肥仲買人」となつていった。彼らの活動は、江戸と周辺農村を結ぶ存在として注目されると共に、農間渡世の下肥商人である名主を中心とした取引圏を江戸周辺農村内に形作つた、と評価できる。大都市江戸の生み出す需要が周辺農村の農業生産にも変化をもたらし、江戸より五里以内の江戸に近接していた地域における江戸販売向けの作物栽培を発展させた。しかし、それ以上に、下肥が運搬される条件そのものが下肥利用を促した面が強い。下肥の購入から施肥に至るまで、肥船で運ばれた下肥を巧みな肥培管理のもとに利用していた例からも、江戸周辺農村においては、農村の基本的経営である田地でも基肥から追肥に至るまで下肥が稠密に利用される。このように、江戸周辺農村の中には、下肥販売と購入の両方を巡って、上層農の活

動が様々な利害関係を持ちながら進展していくことが窺える。以上まとめると、次のようになる。下肥を通じて、都市江戸と周辺農村は離れがたい関係を持った。それは、周辺農村に所在する様々な人々の営みが、都市江戸と周辺農村を結び付けたのであつた。そして下肥は、単なる商品の流通・取引関係にとどまらない、密接な結びつきを双方に生みだしたのである。

#### 〔東洋史学專攻〕

民国期上海紳商による誘拐防止事業  
——中国救済婦孺会資料を通して——

岩間 一弘

中国救済婦孺会は、一九一三年一月に浙江出身の有力商人たちによつて上海の華界に設立された慈善機関であり、女性や児童を狙つた誘拐事件の捜査や、被害者の留養、身元引き渡しづを専門にとり行つた。本稿では、上海市档案館に所蔵されている当会の報告書と書函を主要資料として、当時多発した誘拐事件の社会的背景と、「紳商」による女性・児童救済の論理を明らかにしようとした。

民国期上海の誘拐事件の被害者は、未婚・既婚を問わず、二十歳代以下の若年女性が最も多く、他に、十五歳以下の男子児童も多く含まれていた。若年女性の誘拐は、経済的な困窮以外に、簡素化された請負婚において、花婿の家族から花嫁の家族

に金銭で支払われる花嫁代償が婚姻関係成立の要件となり、婚姻と売買の境界が曖昧になつていていたことを背景として発生して

いたことが、多くの事例から読み取れた。

請負婚の慣習に従つて結婚した若年女性の中には、妻・妾としての地位に安住、あるいは固執する者も多かつた一方で、家出・駆け落ち・自殺（未遂）をして、自らの置かれた困難な家族関係を開拓しようと試みる者がいた。また、自らの愛人と共謀して、他の若年女性を売買したり、売春を強制したり、あるいは慈善団体を欺いて私利を得る詐欺行為に及ぶ者も存在した。

こうした現状に対応した紳商たちは、「良家」の女性と児童を家父長（父や夫）の庇護下に収める方法で、旧社会秩序を乱す「誘拐」（不倫・駆け落ちを含む）に対処した。中国救済婦孺会は、女性に対する職業教育、児童による西洋音楽隊の組織、籤引き大会による運営資金の収集、留養院職員への固定給の支払いなど、西洋文化の影響や産業化の進展に伴う近代的な要素を吸収して運営されていた。しかし、その救済活動では、礼節や德育を重視した教育がなされ、また、花嫁代償を伴う請負婚が正式なものとして擁護されるなど保守的な側面もかいま見られ、本質的には清代以来の善拳の伝統を継承するものであつた。

マドラサはスンニー派法学教育を目的とした高等教育施設とされている。アッバース朝中後期に東部のホラーサーン地方に出現し、セルジューク朝時代、宰相のニザーム・アルムルクの名を冠したニザーミー・ヤ学院が、バグダードその他の諸都市に創立されたことで飛躍的に拡大した。

本論では、ニザーミー・ヤ学院に次ぐ12-13世紀、シリア北部の都市アレッポを対象とする。そこでは軍人階層によつて最初のマドラサが創立されると、多数存在した十二イマーム・シーア派住民による建設の妨害活動がみられた。

従来は、スンニー派復興に関与しつつも、国家的イデオロギー施設という政治的機能の分析か、あるいは国家的性格を否定した学問・教育施設としての性格を前面に出すかで、マドラサの研究上の見解が分かれていた。そこで本論では、シーア派反乱の争点を考察することで、「スンニー派復興」という機能を検討した。その結果、シーア派の異議申立ての論理は、スンニー派復興施設マドラサの建設に反対したものではなく、創立者である軍人側も、親スンニー派政策のためにマドラサを建設したというよりは、より地域的な政治的利害を尊重したためであつた。

このように、従来の政治的機能の分析も教育施設の分析も、

## 12-13世紀アレッポのマドラサの発展とウラマー

阿久津正幸

スンニー派とシーア派の対立という大きな政治・社会的枠組みに強く依存していたものであり、マドラサをめぐる実際の状況分析の結果ではなかつたことを指摘した。そこで、政治・社会的状況下での学問・教育施設という設定で、創立者である軍人階層、そしてマドラサにおける活動主体であるウラマーとその学問内容を考察することは、より包括的なマドラサの分析と評価が可能となるという視点にたつて、そのための予備的作業を行つたものが、この修士論文である。

マムルーク朝 Barqūq 治世下におけるバフリーからブルジーへの支配構造の変化の中での果たした役割について—Ibn Taghri Birdi の年代記から—

小野原 和江

Barqūq の治世は、前スルタンの復位期間を挟んで第一治世（一一一八一・六—一二一三八九・一）と第二治世（一二九〇・二—一二九九・六）に分かれる。第一治世では、彼の配下の者がごくわずかしかアミールに任命されていない」とやスルタン暗殺未遂事件が多発していること、アミールへの下賜が多く行われていることから、前王朝の残存勢力が依然勢力を維持しており、スルタン位まで登り詰めた Barqūq をもつてしても、彼らを押さえ込めなかつたことがわかる。また、第二治世ではスルタンによる財産没収がかなり行われていること、配下の者のアミール任命が増え、高官さえ輩出するようになつていていることから、Barqūq が強硬的な態度で彼らを支配下においていたこと、彼の権力が飛躍的に拡大していることがわかる。

この二つの期間の相違には二つのシリア反乱が大きく関わっている。初めの反乱はシリア太守として任地で勢力を蓄えている。an-Nāṣiri によって成功し、Barqūq は退位を強いられるが、この反乱を教訓とした復位後の Barqūq は太守の任地先での統治期間を短縮し、傘下のアミールをシリアに送り込むことによつて、太守と土着勢力との繋がりを断ち切り孤立化させ、太守を弱体化させる。その結果、Mintāsh による二度目のシリア反乱は失敗に終わる。こうして残存勢力は次第に衰退し、Barqūq は権力を拡大していくのである。

Nujūm az-Zāhirah fi Muhibb Mīr wa'l-Qāhirah (『エジプト史』) を用いて、政権奪取を行つた Barqūq が、どのような政策をとつてトルコ系マムルークを押さえて政権を拡大していくのかを論じた。

## ガーザーン・ハンの建設事業

——ガーザニーヤを例として——

川崎 晋

イルハン国第七代ハンであるガーザーンは自らの墓廟をその首都タブリーズの郊外に建設し、小都市とし、ガーザニーヤと名付けた。本論はその形態を主にラシードアッディーンの集史の記述からみていき、その歴史的位置付けを行ない、他の都市との比較から遊牧民と都市の関わりについて考察することをその目的とする。

モンゴルと都市あるいは農耕との関わりは当初は掠奪・交換という形で進行していった。しかし、定住地域と接するうちに建築物に興味をもつようになる。

イランに政権を築いたモンゴルのハンたちも建築に興味を示し、建設を命じたが、それを政策に利用しようとはせず、その行為にのみ執着した。ところが、ムスリムになつたがガーザン・ハンは、ムスリムとしてイラン人を治めるために、政治的に建設事業をすすめていった。そのようななか、モンゴルの伝統にとらわれることなく、自らの威信を示すため、パフォーマンスの意味も込めて、自らの墓廟を首都タブリーズの郊外に建設し、慈善施設を付設することによって、ムスリムとしての義務を果たすこととした。その墓にはガーザーンの妃や息子も葬られた。地理的にモンゴルの好む位置に作られたが、同時に定

住民にも都合がよく、交通の要衝に位置し、商業地区その他をもつ小都市でもあつた。ガーザニーヤのタブリーズとの距離的な近さからその補完的役割も担い、それこそがガーザーンの狙いであつたかとも思える。また、イランの伝統的君主觀に則つた都市建設でもあり、イスラームの様式に則つた建設であり、複雑な民族構成をもつイルハン国に合つたものとなつてゐた。その都市の財政的基盤はワクフとされ、末長く維持されることが願われた。しかし、モンゴル自身はあまりガーザニーヤを利用せず、一七世紀には次第に維持されなくなり、そのイラン人の定住の増加と、タブリーズの拡大にともない、飲み込まれるようにして消えていった。

モンゴル自身による都市建設としては、その後のスルターニーヤが挙げられるが、ガーザニーヤはそれと比べると、遊牧的な特徴はより希薄である。

モサッデク政権期におけるテヘランのバーザール勢力の役割——ティール月三十日事件を中心として——

貫井 万里

イランで第二次世界大戦後、民族主義運動が高揚した。一九四九年から五三年に亘る石油国有化運動はアングロ・イラニア石油会社によつて独占されていた石油権益の回復、傀儡君主モハンマド・レザー・パフレヴィーを通じて政治に介入する帝

国主義勢力の排除、民主政治の確立を目的としていた。この運動の指導者モサッデクは国民からの圧倒的な支持を得て、一九五一年に石油国有化法制定に成功し、首相に就任した。

モサッデクの支持基盤として知識人、宗教勢力、バーザール勢力が早くから指摘されてきたにもかかわらず、バーザール勢力に関する研究は充分になされて来なかつた。本論文の狙いはモサッデク政権期におけるテヘランのバーザールの諸組織及びその政治参加の実態を究明することにある。そこでモサッデクが最大の政治的危機に陥つたティール月三十日事件におけるバーザール勢力の動向を分析の中心対象とした。

事件の契機は外国勢力、宫廷、保守派の陰謀によるモサッデクの首相辞任であつた。反対派はモサッデクの企図する改革の阻止を緊要としていた。かわつて誕生したガワーム政権に対し、モサッデクを支持するイラン民衆は抵抗運動を開始し、七月一九日から二一日にかけて全国諸都市で多数の死傷者を出すに至る大規模な衝突が発生した。その結果シャーは軍事制圧を断念し、人々の要求に従つて再びモサッデクを首相に任命し、事件は民衆の勝利のうちに終わつた。

従来の研究ではこの事件における宗教勢力の役割が強調されてきた。確かにカーシャーニー師の呼びかけが信仰篤い庶民に影響を与えたことは否定できない。

しかし、実際に蜂起に参加した民衆の視点がこれまで看過されてきた感を免れない。事実バーザールの中心組織である商人・アスナーフ・職人連盟はモサッデクの辞任直後から抵抗運

動を開始し、カーシャーニー師に参加を促していた。加えて蜂起が農村へ拡大せず、都市に限定されていた事実を考慮すると、都市経済を担い、多数のメンバーを擁すバーザールの諸組織がこの事件で大きな役割を果たしたと考えられる。

また歴史的にバーザール勢力は都市生活の中で権力への様々な抗議手段を編み出してきた。とりわけ七月二一日に行われたアーシューラーの服喪行進を模した集団行為は人々のエネルギーを興起させる上で重要な意味を持った。同様の象徴行為は二〇世紀初頭の立憲革命や一九七九年のイラン・イスラム革命においても現出した。ティール月三十日事件を通して抵抗の文化の継承と創造が行われたと言える。

### バルカン半島におけるアーヤーンの台頭

— テペデレンリ・アリー・パシャとデルベンダード・バシユブルーの関係 —

伴 俊助

本論文は、一八世紀から一九世紀前半にかけてのオスマン朝において大きな影響力を有したアーヤーンの支持基盤を制度史的観点から考察した。また、この論文では従来の社会経済史的観点以外に制度史的観点からのアーヤーン研究や、オスマン朝領内の各地域における地理的、社会的多様性がアーヤーンの支持基盤に影響を与えていたのではないかという可能性を問題意

識として提示した。

本論文では、こうした問題意識をふまえた上でアーヤーンの支持基盤の一事例としてバルカンの強大なアーヤーンであつたテペデレンリ・アリー・パシャの支持基盤がデルベンド制度であつたことを考察した。

デルベンドとは山道 자체や山道を維持、警備する部隊のことを指す言葉あり、デルベンドはオスマン朝領内の各地に広く存在しバルカンにおいて組織されていた。この部隊の長にはその地域のアーヤーンが任命された。この部隊の長に任命されたアーヤーンは自らの支配地域外においても軍事行動を行うことができた。このことがアーヤーンの軍事制度的な面での支持基盤になつていると考えらる。イスタンブルにはテペデレンリ・アリー・パシャが実際にデルベンドを理由にして周囲のアーヤーンに対して軍事行動や干渉を行い、自らの支配地域を拡張していたという記録が残されている。

このようにデルベンド制度が周囲のアーヤーンに対して軍事的優位に保つことのできた理由になつていたと考えられる。

### 市域の拡大に見るマリーン朝時代のフェス

山下 康之

モロッコの古都、フェスは八世紀に創建されて以来モロッコの中心都市として発展してきた。本論は十三世紀に成立したマ

リーン朝期を中心に、アラビア語の同時代史料を用いて、フェスの発展を市域の拡大の面から論じたものである。

八世紀にイドリース朝によつて首都として創建されたフェスは交通の要衝にあつて、豊富な資源を誇っていた。フェスはその利点を生かして発展し、市域も拡大した。十三世紀半ばになるとマリーン朝がフェスを占領する。さらにマリーン朝はその近郊に王宮、政府その他からなる新都市フェス・ジュディドを造営し、これを首都とともに、軍事的・政治的拠点として整備を進めていった。

一方、マリーン朝はフェスで多くの公共事業を行い、その結果、フェスには荒廃していた農村やレコンキスタに苦しむandalusから多くの人口が流入した。フェスは経済と学術の中心として繁榮し、城壁外の地区（ラバド）にも産業拠点や住居が広がつていった。そんな中、フェス・ジュディドは十四世紀半ば以降、マリーン朝の弱体化に伴つて、元來の機能を弱めていった。

この町の変化を詳細に追い、さらにフェスにおけるラバドの機能と構造を明らかにしていくと、この都市がラバドと同じ性質を持つフェスの一郊外に変質したことが分かる。

この都市が政権所在地であつたにもかかわらず、十分に発展できなかつた理由は第一にその発展を拒む地形上の制約にある。しかし、その他にフェスの市民がマリーン朝に対して嫌悪感を抱いていたことやマリーン朝政権の動向、フェスの経済構造といったフェスの事情が大きく関係していた。

筆者は両都市の変遷はその有機的な関わりにあつたと結論付け、さらにそこからイスラム都市の中でも、近接する二つの都市を一体のものとして見る「二重都市」という新しい枠組みと視座を提案した。

### 【西洋史学専攻】

#### 初期フィヒテにおける国家

##### ——『自然法の基礎』を中心にして——

岩村 雅人

フィヒテはドイツ観念論哲学の流れのなかで重要な一画を占める哲学者であるが、その他の領域においても大きな功績を残した思想家である。本論文においては彼の初期における政治哲学の変遷を、彼の理論的には最も精緻な政治的著作である『自然法の基礎』を中心として、当時の時代状況と突き合わせることによって論及することとする。

一七九六／九七年に著された『自然法の基礎』においては、知識学の諸原理より複数の理性的存在が必然とされ、さらにこれらが共存していくためには相互に自己制限を行い、権利関係にあることが必然となる。そしてこの相互自己制限を保証するものとして國家が必然となるのである。さらに権利主体としての能力を全員が持ちうるよう国家は経済に介入していく必要性も述べられている。このように『自然法の基礎』では社会契約論的側面と、『封鎖商業國家論』に近い側面を共に備えているが、これはフィヒテがその特殊な出自にもかかわらず、結局は同時代の知識人と同様、上からの革命に期待せざるをえなかつたとの結論に達した。

フィヒテが生きた時代のドイツは、すでに産業革命が始まっていたイギリスや、大革命の起きたフランスと比較して圧倒的に遅れており、中世的な政治・経済システムがいまだ健在であった。フリードリッヒ二世、ヨーゼフ二世らの啓蒙絶対君主が現れたためもあって、啓蒙主義の影響を受けた当時の知識人たちは上からの近代化が進められることを期待していた。これは英仏においては近代化の担い手となつた市民層がドイツでは

C・B・マクファーレンのエドマンド・バーク解釈について

遠藤 吉宗

〔民俗学考古学専攻〕

壁画から見た天山ウイグル王国の仏教

島 恭裕

瀬戸内海における沿岸漁撈の研究

鯛 鮎

縄文・弥生時代イノシシ類の形質差とその背景

姉崎 智子

南関東縄文時代中期後半における土器型式の変化と

合田恵美子

縄文時代の居住形態と集石遺構の性格

相馬 容子

青銅器時代におけるメソポタミア宮殿の平面構成と機能

高田 学

明治印判磁器研究の現状

中村 弘昌

石器石材の物理的性質からみた旧石器製作過程の検討

米倉 薫

一九九七年度卒業論文題目

「日本史学専攻」

持統天皇論

武藏国の渡来人に関する一考察

古代日本の漏刻と時刻制度

宇多天皇と即位と譲位に関する考察

鎌倉新仏教の教化活動に見る教育的側面

—日蓮の伝道文書を中心として—

東寺政所の成立と変質期の東寺について

菓子概念の変化と食品発展の背景

精進料理の発達

鎌倉公方と関東管領の対立について

—永享の乱における持氏と憲実—

十五・六世紀の河原者の動向とその周囲

関ヶ原合戦前の徳川氏と島津氏の関係

江戸の出版文化

—戯作評判記に見られる読者の傾向—

幕臣の養子縁組について

秩父地方の地芝居

深川獵師町における町並地編入について

江戸の小旅行—相模国大山参詣を中心にして—

鹿児島琉球館にみる薩琉関係

非人溜の研究—品川溜を中心に—  
近世女性の農作業への関わり方  
武将石田三成の人物像

岩倉使節団において維新政府首脳が海外を経験したことの意義

朝鮮植民地研究(近代日朝関係史)の現状と問題点

福澤諭吉における精神の近代化

奇兵隊創設への要因を探る

—活躍の裏にある高杉晋作の限界—

アジア主義と東亜同文会の成立にみる近衛篤麿の思想について

日本海軍の南方進出における対米戦争認識

海軍内閣の成立過程とその役割

日露戦後における陸海軍による軍部の二重構造化

—帝国在郷軍人会設立時の海軍と「地方」—

国民学校教育にみる特質 天皇信仰と宗教的規制力

秘密戦における軍民間の相互作用と接点

—沖縄戦の情報戦略に関する一考察—

「東洋史学専攻」

お茶と秘密結社の関係

—天地会の茶碗陣をとりあげて—

一九世紀香港の欧亜混血人

—何東一族を中心にして—

深堀 優子  
藤井 紀子

本庄 大輔  
川澄 勤

秋田 修平  
伊藤 浩二

末松亞希子  
山本 輝

松田かの子  
渡辺 敦史

坂本 泰人  
富越 薫子

松岡ひとみ

赤松 由枝

飯川 敦子

石原百合子	宅和 斎子	津村 奈美	福島 和代
稻沢 計典	石原 阜治	黒瀬 直子	林 祐司
細川 義行	毛利 弘道	河村 隆志	
今川由紀子	白倉 美穂	高山 慶子	原 淳一郎
深瀬公一郎			

- |  |  |   |  |
|--|--|---|--|
| マックス・ウェーバーと中国社会構造の近代化<br>——インドネシア近代化の中のジャワ   | 石川 智也  | 朝鮮人従軍慰安婦に対する<br>「強制連行」と「売春婦」という概念   | 横田 直   |
| 清朝末期に見る西太后の存在意義について<br>ラツフルズ・ホテルから見たシンガポール史<br>媽祖信仰に見る前近代的信仰の諸相  | 一條奈穂子<br>乾 千代<br>今泉有央子<br>海野 稔子<br>草葉 愛  | 満州建国大学の創設に見る「民族協和」の一重性<br>人力車の変遷を通してみた清末<br>本色教会運動にみる中国的思考<br>ベトナムの新興宗教の成立と   | 吉田素一郎<br>吉田健一郎<br>米沢 大介  |
| 「芙蓉鎮」と現代中国<br>近代上海における売春婦と租界制度<br>広東日本租界における結婚拒否運動の文化的背景<br>上海日本租界における日本のユダヤ政策<br>一九二〇年代初頭の上海における纏足解放<br>上海における民族資本百貨店の誕生と発展<br>近代華北村落の一断面<br>海峡華人論——林文慶の場合<br>民国期の孔子生誕節 | 新谷美登利<br>鈴木 美香<br>関口 輝<br>高原 克成<br>竹内 寿夫<br>大道寺慶子<br>葛谷 裕<br>檜林 ゆり子<br>温井 英哉<br>野田 和雅<br>早川 大介<br>前田 貴治<br>増島 美和 | 沈括の陰陽五行思想の位置づけ<br>漢晋の皇太后についての一考察<br>古代中国の音楽の政治的意義について<br>古代中国の世界観<br>隨都大興城の都市計画とその思想<br>『莊子』五二篇本解説篇に関する一考察<br>初期の洞室墓に関する一考察<br>『韓非子』難勢篇における「勢」の一考察<br>前漢が匈奴・呼韓邪单于に与えた地位について<br>殷周時代の青銅器上にみえる動物紋様について<br>三星堆器物坑を中心にして見た<br>殷周王朝交代期における蜀の動向 | 渡辺 秀樹<br>浅倉 亮介<br>石田 宗一<br>井上 壮人<br>木下 佳恵<br>後藤 素直<br>斎藤 岳久<br>土屋 国昭<br>遠山 尚<br>中島 紀人<br>中村由布子<br>早野 智陽<br>三浦 和郎<br>村松 韶<br>秋武 紀子<br>猪俣 範子 |
| 宗江は何故偉いのか<br>——近世中国人の望んだリーダー像——<br>朝鮮戦争における<br>春川の戦闘の推移と朝鮮人民軍の初期作戦計画<br>「内台共婚」にみる植民地台湾   | 松島 正仁<br>三品憲一郎<br>柳沢 真美  | 塙主にみられる道徳的性格とその淵源<br>漢帝国における三老について<br>中国史料に見られる突厥觀<br>ユーロスラビア紛争   | 横田 直<br>吉田素一郎<br>吉田健一郎<br>米沢 大介  |

## イランの農地改革

大竹 恭子

上島 里香

## イスラーム世界の女性

鎌田 美和

上田 英治

## アラブ・イスラーム支配確立までのソグディアナ

小林 正史

内鴻 香子

## ドイツのトルコ人

三枝 正樹

田中 晋

## クルド部族社会の変遷

酒井 健

鈴木 なお

## スペイン料理のなかのイスラームとユダヤの食文化

中崎 郁子

島村 大助

## イランの任侠集團

宮下 基

佐藤 潤

## 米国農業政策がエジプト人口政策に与える影響

内田 雅也

大野 奈穂子

## 旋法組織マカームの作曲技法としての可能性

荻野 剛久

尾谷 幸治

## 大戦期エジプトにおける社会運動

勝沼 聰

柏谷 彩

## 一初期のムスリム同胞団を中心にして—

小林 剛

國広 美穂子

## 一四世紀後半から一五世紀前半のカイロにおけるコーラン

高橋 勉

倉科 岳志

## 読誦とコーラン読誦者についての一考察

西田 深田 室岡

後藤 英彦

## 一八世紀エジプトにおけるハルクティーヤ教団について

小林 真知子

小松 瑞奈

## —ジヤバルティの年代記によりながら—

高橋 圭

櫻井 文子

## 法としてのシャリーア

西田 晶子

佐藤 誠司

## 七・八世紀のシリアのイスラーム化

深田 穂子

島田 誠司

## ケマリズムにおける世俗化

室岡 彩子

鈴木 なお

## [西洋史学専攻]

伊東 剛史

田中 晋

## 一九世紀イギリスにおける

稻垣 玲子

鈴木 なあ

## 労働者の自叙伝の生産・消費・流通

伊東 剛史

島村 大助

## ロシアにおけるキリスト教受容

稻垣 玲子

鈴木 なお

## 一八世紀イギリスにおける茶文化定着の要因に関する考察

田中 晋

島田 誠司

## 西欧キリスト教世界の形成途上におけるゲルマン人の

上田 英治

## 民族特性とその沈潜

内鴻 香子

## ヨーロッパ統合

田中 晋

## アメリカ植民地時代における

鈴木 なあ

## シチリア王国フリードリヒ二世治下における貿易政策

梅谷 昭範

## 英國人のアメリカ移民の諸要因

大野 奈穂子

## 進化論の人間社会への適用の歴史

尾谷 幸治

## 教養市民層とナチズムの共存までの過程

柏谷 彩

## イギリス産業革命期における金融業の生成と発展

國広 美穂子

## マキアヴェッリのチエーザレ観

小林 真知子

## —君主思想の生成と展開—

高橋 勉

倉科 岳志

## パウロの教会観について

後藤 英彦

## H.Jと青年の抵抗

小松 瑞奈

## 政権獲得までのナチス党の活動

櫻井 文子

## 一八世紀イギリスにおけるファッショニと古着取引

坂本 学

## マックス・フォン・ペッテンコーファー

佐藤 誠司

## (Max von Pettenkofer 1818-1901)

島田 誠司

## 中世初期の都市の特徴と連続性

鈴木 なあ

## ニーチェとゲーテにおける反近代性についての考察

島田 誠司

## ハップスブルグ家のドイツにおける影響力の変遷

鈴木 なあ

## ナチスによる障害者「安楽死」計画

島田 誠司

## 「社会ファシズム論」の成立と終焉

鈴木 なあ

一七、一八世紀北アメリカ植民地の市場で書物の  
果たした役割について

辻 順三子

一九三〇年代イギリスのファシズム認識に関する一考察

辻 卓也

中世パリのパン屋をめぐる規制の目的

テノチティランの攻防戦

—なぜコルテスはアステカを征服できたか—

中山 徹文

一八世紀プロイセンにおける社会の規律化の諸相とその影響についての考察

革新主義の時代と一九二〇年代の連續性について

花光 博之

政治家コンスタンティヌス

林 裕介

中世魔女狩りに学現代社会

藤井 範子

マヌエル一世の対ヴェネツィア人対策

堀川 基晴

一一七一年の事件を中心として—

細木 裕之

イギリス教会の誕生

峰尾 寛彦

ゲーテの自然観—ゲーテとニュートンの色彩論争

松崎 崇

近代国家の成立過程

渡賈 俊明

「島民」の創造と植民地の拓殖

坂本悠三子

コンパニオン・アニマルとしての犬に見る現代日本人の人・犬関係

飯高 伸五

「ビッグマン社会」の調停者たち

石田慎一郎

新聞における考古学

市川 勝也

アフリカ都市人類学におけるバビロニアの月の暦とその天文学

上杉 茂生

エスニシティ論の変遷をたどる

江口 敏子

生活様式が身体に及ぼす影響

大場 毅

地震考古学の展望

江口 敏子

古代メソポタミアの神殿遺構と神官王の出現

堀川 裕之

モンゴル遊牧民の空間認識

細木 基晴

尖頭器及び両面加工石器の折断

木戸 雅裕

伏羲と女媧の図像学的研究

川崎 知茂

続縄文文化の鉄器に関する一考察

川崎 知茂

洋風建築導入最初期における和洋折衷のかたち

佐藤 裕一

神奈川県真鶴町における潜水漁業従事者に関する歴史人類学的考察

佐藤 裕一

馬形埴輪の研究について

山田裕美子

多人数合葬や集骨葬の先行研究に関する一考察

イタリア・コンパニニア

古墳時代の鈴について

中国のカワウソ漁に関する考察

弥生時代の石鎌研究史

一九六〇年代以降の

メキシコ人非合法移民労働者の戦略

江戸時代の櫛に関する一考察

江戸遺跡出土の文字徳利の分析に関する一考察

シカンのナイペに関する考察

憑きもの「イヅナ」の生成に関する一考察  
ある日本人ムスリムのライフヒストリー  
ラ・テヌ美術に見られる

ケルト美術の独自性について

頁岩製石器における被熱の痕跡について

篠原 慎二

豊田 長島 賴利 薫

平井 古川 堀部 真一

和田 百瀬 宮崎 洋平 武藤 真吾

渡邊 高潔 正樹 園子